
グランドフィールド

夕原あかね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グランドフィールド

【Nコード】

N9150C

【作者名】

夕原あかね

【あらすじ】

今日は魔導養成スクールの入学試験日。この、超難しい試験に、果たしてボクは合格できるのか………試験課題の「三つの秘宝玉」を探して、ボクの冒険が始まった！

くプロローグ

何も無い空間

風も吹かず、木々が生い茂る事もない、ほんとの『何も無し』
そもそもここは空間なのか

そこに、一つの人影がしばらくあった。

人影は、誰かを待ち続けているのか、動きもせずこの空間のただ
一点をじっと見つめていた。

ふいに

その一点からねじれの様なものが起こった。

だんだんとそれは一つの影を形成していき、そして

『おわあっ!!』

ドーン。

と、ねじれからの人影がそのまま遙か下へと落ちていった。落ち
たときの衝撃がかなり強かったのか、立っていた人影が少しよろめ
いている。

『おつとと……ふう。やっと来ましたか』

その人物は、人影の落ちていった方向を絶えず見つめて、つぶや
いた。

『おい！ 何だこの落とし穴は！ こんなところへ私を呼んできた
と思ったら……』

その『穴』に落ちた人物も、やっとの事で這い上がってきて、目
の前の人物に向かって叫んだ。

『ああごめん。そんな所に穴があったとは、私も予想外で……』
『…絶対わざとやっただろ……』

『彼』は、目の前の『彼』に向かってつぶやいた。

『でも、私がこんなところに貴方呼んだ理由は、分かっているの
でしょう？』

先にここについていた『彼』 白いローブを羽織った男は、目の
前の『彼』 漆黒のローブを羽織った男に向かって話しかけた。

『ああ。当然分かっているぞ』

漆黒のローブの男は言った。

『当然「彼女」のことだろう？』

漆黒のローブの男の質問に対し、白のローブの男は、薄笑いを浮
かべた。

『……やはりか』

『「彼女」は、今のところそれなりの力を持つてるみたいですよ…
…本人は気づいてないけれど』

『まあ、あの試験もおそらく……大丈夫だろう』

『なんですか？ その妙な間は。そこまで不安でしょうか？』

白のローブの男は半分笑いながら尋ねた。

『それは……』

『「彼女」はおそらくあれを見つけ出しますよ……私の予想では』
だが。と、白のローブの男は急に真剣な眼差しになった。

『私が不安なのは、もう一人の方……』

『まだ見つからないのか？』

漆黒のローブの男が言った。

『あれを、彼女一人で食い止められるのか……』

『まだ分かりません』

白のローブの男が口を開いた。

『まだ見つかってない。ただ、貴方はご存じでしょう？ 「彼女」
の力の事……』

『ふん。分かっているさ。ただ、それは「あの存在」も同じ事。お

前は当然……』

『ええ、分かっています。ただ、全ては彼女次第。ほんとに全てがね………』

『そう言い終わると、白のローブの男はとても悲しい目付きになった。』

『……さて、そろそろ始まるぞ。こんなところに長居は無用だ』
『そうですね。と、白のローブの男は振り返った。』

『私たちは、そろそろ「見」に回らせて貰いましょう』

暫くしてから、空間は元の「無」に戻っていった……

試験前の明け方に

明け方

「黒水晶はあと一つ！ おそらくこのあたりに……」

日の出が近づく空に、一つの人影があった。

人影の背中の辺りにはコウモリのような翼が見えている。

人影は手にしている古めかしい杖を見つめた。先端には青く透き通った宝石の様な物が付いていて、それがずいぶん輝いている。

「あつ！ 反応が強くなってる！ じゃあ、もうすぐ近くに……」

ゴンッ！

「！……！」

彼女は突然空中で静止したかと思うと、頭を抱えてもがきだした。何か、壁のような物に頭をぶつけたようだ。おでこの辺りが見事に腫れ上がっている。

「いったーい！！！！ 何でこんな所に魔法結界がはってあるのさあ！？」

彼女はおでこの辺りを押さえながら辺りをさすった。どうやらこの辺一体、魔法結界が張られている様だ。

「これじゃあ先に進めないなあ。でも………」

彼女はまた杖を見つめた。先端の宝石はずいぶん輝きを増している。

暫く見つめていると、彼女は一つの結論を出した。

「よーし！ 行動しなきゃ始まらないっつと……！」

彼女は結界に向かって杖を前に差し出す。

そして、その杖の宝石に向かって魔力を送り始めた。宝石はだんだん色を変え、緑の輝きを発し始める……。

「いつけええー！！！」

叫んだ瞬間、宝石から緑の閃光が放たれた。

閃光は束になって結界にぶち当たったとたん……

バチィィ！

そんな鋭い音がした同時に、そこにはシュウシュウと音を立て、大きな穴をぽっかり開けている無惨な結界の姿があった。

「よし。OK。さっさと探さないと！」

少女はそう言つと、結界にあいた大きな穴を潜り抜けて、中へと入っていった。

「おつかしいなあー。この辺りのはずなんだけど……」

暫くして、今度は背中に鳥類のごとき翼をはやした少年が結界の辺りにやってきた。

彼は結界に気づいてから、どこか抜け道はないかとさっきから探し回っていた。

とその時。

「あつ。」

探し回って彼が見つけたのは、まだ微かにシュウシュウと音を立てて、ぽっかり穴の開いた箇所だった。

「よかったー。これで後一冊の白の魔導書も見つかる」

そう呟いて、彼も又その穴から中へと入っていった。

そしていよいよ夜が明ける……………

今日、ここで行われるのは、魔導養成スクールに入学希望書を出した、一人の子どもの入学試験

ドタバタな朝の時間

ジリリリリリ……………

うう……………五月蠅い……………

カチッ

はあ……………眠い……………あともう少し……………

……………

……………！！

ガバアッ

「いけない！ わあーっ！ 大変だあつ！」

ボクはベットから飛び起きると大急ぎで顔を洗った。

今日がとても大切な日だって事、少し忘れてたあ！

大急ぎで寝巻きのまま階段を駆け下りた。

「わわっ。早くしないと！」
バタアン！

ボクは乱暴にリビングのドアを開けた。

「ちよつと、朝から一体何の騒ぎ？」

立ったまま息もつかずに朝食を口の放り込んでいるボクの様子を見てお母さんが言った。

「ふえ、ふあっふえひょうふあ……………」

「食べながら喋らないの！」

怒鳴り気味のお母さんの声で、ボクは口に入れていたハムエッグを慌てて飲み込んだ。

「今日は魔導養成スクールの入学試験の日だよ！　そこまで行くのに二時間ほどかかるから、早く準備しないと……」

片手にパンを握りしめて、ボクは超早口で喋った。だけどお母さんはボクの慌てぶりを横に自分の皿の後片付けをしている。

「あれ、どうしたの？　さっさとしないとボク……」

「おばあちゃんが昨日、試験会場までワープの魔法陣を繋げておいてあげるって言ってたでしょ」

あ……………

お母さんの言葉に、ボクは固まった。

それで、今口にくわえようとしていたパンを慌てて落としそうになった。

「全く……………」

お母さんは今のボクにすっかり呆れている。

「とりあえず、ゆつくりと朝食を食べてから、着替えてきなさい。服はクローゼットに掛けてあるからね」

「……………へへ……………はい」

あーあ……………朝からこんな調子で大丈夫だろうか。ボクは、今度はしっかりと椅子に座って、ゆつくりと食べかけのパンをかじった。

ボクは朝食を食べてからもう一度上に上がって、クローゼットにあった今日の試験用の服に着替えた。この服は魔導養成スクールから配給された物で、特に上着は実際の魔導師みたいに薄めの軽い皮

で出来ている。なんだかそれだけでボクはとっても嬉しかった。

あ、説明が遅れたけど、魔導養成スクールってというのは、将来優秀な魔導師を育てるために「魔法」中心の授業を行っている唯一の学校だ。ちなみにボクのお父さんはとても有名な魔導師で、今は家に帰らずあちこちの町や村を旅して、沢山の人を助けている。

話を戻して。で、今日の試験というのは正確には実技試験で、その前の筆記試験、面接試験をクリアした人たちだけが受けられるという、超ハイレベルな試験なのだ。ひえー。

肝心のボクの力量だけど……… 恥ずかしながら、もっともメジヤファイヤー、アイス、氷系の魔法も、楽々使えるのが最下位威力に属する「フレイルム」と「コールド」だけ。そもそもこの魔法は簡単な物を燃やしたり、冷やしたりするいわば「家庭用」魔法で、実際、攻撃には全然使えないのだ。その肝心の攻撃魔法も、最下位級に属する「ファイヤー」と「アイス」がやっと使えると言ったほど。

……… まあ要は、ボクの力量は魔導養成スクールの入学実技試験を受けるには、とつともなくへなちよこだということだ………。

……… 自分で言うのも何だけど、本当にまともに試験を受けられるのか不安になってきた………。

服を着替えて下に降りると、今度はおばあちゃんも朝食を食べにここへ来ていた。

「あ、おばあちゃん！ ねえ、この服どう？」

「まあ、とつともよく似合ってるわよ」

「へへ……… ありがとう」

お母さんも奥からこっちに来た。

「あら、よく似合ってるじゃないの。小さな魔導師さんね。………

…そう言えば、若い頃のお父さんにそっくり」

いきなりお母さんがお父さんの話を持ち出してきて、びっくりした。……お父さんの若い頃って、一体どんなだったんだらう？

「……ちよつとこっちへおいで」

ふいに、おばあちゃんがボクを呼んだ。

「え、なあに？」

すると、おばあちゃんは懐から少し古めいた赤いスカーフを取り出し、それをボクの頭にバンダナの様にして巻き付けた。

「わあ、そっちの方が似合ってるわよ」

「へへ、そうかなあ……」

お母さんがまた褒めてくれて、ボクはちよつぴり嬉しかった。

「それはお父さんがまだ新米の魔導師だったときによく付けていたんだよ。今日の試験のお守りだよ」

おばあちゃんの予想外の言葉に、ボクはとつてもびっくりした。

スカーフは所々破れていたり、シミが付いている所が結構あった。でも、これを昔お父さんが付けていたんだって思うと、ボク、なんかとても嬉しくなってきた！

「……よし！ おばあちゃん、お母さん、ボク、がんばるよ！」

さっきの不安な気分はすっかり消え去った。よし！ こうなったら、精一杯がんばらなくちゃ！

「忘れ物はない？ しっかり確認した？」

「うん！ 大丈夫だよ、お母さん」

試験会場へと向かうワープの魔法陣の前で、お母さんはさっきから心配している。

「いよいよ、最終試験をボクは受けるんだ！ もう迷いなんか無い。力の尽くす限り、やれる限りやってこなくちゃ！」

「お母さん達も応援してるから、しっかりとがんばってね」

「……しっかりとやるのよ」

お母さん、おばあちゃんの言葉、なんだかいつもより重い感じた。

「がんばってくるよ！ じゃあ……行ってくるね」

ボクはバンダナをしっかりと締めると、ワープの魔法陣の上に乗った。

ふっ、と軽い浮遊感が出てちょっと焦った束の間、目の前のお母さんとおばあちゃんが、ぐにやりとゆがんで消え去った。

いよいよ試験開始！

ワープ地点は、ただただ広いだけの野原だった。（野原というか、「外」と言った方が正しいかも……）だけど、何もない代わりに、そこには沢山の人がいた。

「あっ！ 来たよ！」

??？ どこかで聞いたことある声……
と、その時。

『ワアアアアア！！！！！！！！！！』

ドキッ！ な、何なんだこの歓声。もとい、黄色い悲鳴は。

「がんばってー！」

「ファイター！！！」

わっ！

ここにいるのは全員、幼稚園の時のお友達だ。クラスの違う子や、園長先生までここに来てる。な、なんか緊張するなあ。

「おはようございます。良い天気ですね」

ふいに後ろから違う声が聞こえてきて振り返った。

「今日の入学試験は、私と、あと二人の先生達が審査をします。よろしくね」

優しい声のこの先生に、ボクは見覚えがあった。

「あの、貴方って筆記試験の時の……」

「ええ、そうですよ。筆記試験の時の担当でした。」

やっぱり。この青いロングヘアが似合う美人で優しい先生を、ボクが忘れるはずはなかった。

「あと、今日の実技試験担当の先生と、面接試験担当の先生も一緒に審査をします」

あれ？

今の言葉にボクは妙な違和感を抱いた。奥の方を見ると、さつき
言っていた二人の先生が見えた。ん？「二人」……………？

一人は初老の、魔導服に白いケープを掛けた女の先生。もう一人
は、真つ黒な髪を一つ結びにした、若い女の先生だ。……………あれ
れ？？

「あの……………」

ボクは筆記試験の先生に尋ねた。

「なんですか？」

「えっと……………ボクの面接試験の時の先生は来てないんですか？ ち
よつと気になって……………」

ボクの面接試験の時の先生は、確か二人の男の先生だった。だけ
ど、ここには幼稚園の先生達以外で、男の人は一人もいなかった。

「……………」

筆記試験の先生が、急に口を閉じてしまった。

「あ……………えっと……………あの……………」

「ああごめんなさい。今日はその先生はお休みなの。だから、あの
先生が代わりに入ったんですよ」

先生は、一つ結びの先生を指差していった。なんだ。ただ休んで
ただけなのか。

「はい。これ、試験票です」

ボクは試験票を取り出して、先生に渡した。

「ああ、ありがとう。それじゃあ、こっちへどうぞ」

ボクは先生について、他の先生の所へ行った。そこは、地面がま
っすぐ五メートル位青くなっていた。

「はじめまして」

「こんにちは」

二人の先生が挨拶をした。

「こんにちは。今日はよろしくお願ひします」

「じゃあ、ちょっとこっちに来てね」

そう言われて来たのは、さっきの青い道の一番端だった。そして、

先生は向こうの端に立った。

「じゃあ、その青い道をそのまま真っすぐ渡ってこっちまで歩いてきてね」

??？　ボクは意味が分からなかったけど、言われたとおりに歩きました。でも、別に変わったことはなかったけど……

「目立った魔力の反応は無し……」と。はい、これで最終チェックは終わりですよ」

……なるほど。

どうやらこれは一定以上の魔力に反応する仕掛けになっているみたいだ。なんかすごいなあと感心してしまう。

「これをどうぞ」

実技の先生にそう言われて受け取った物は、小さな地図だった。森の中の神殿、荒れ地の塔や、大きな湖なんかが描かれている。

「今日の実技試験の試験課題は、そこに描かれている大地の神殿、幻影の塔、湖底の神殿に隠されている『三つの秘宝玉』を日が沈むまでに探し出してくる事です。ちょうどこの森からその荒れ地を通って、湖の方からこの場所へ戻ってくる様になっています」

ボクは地図を見ながら話を聞いていた。

「この地図に描かれている場所の周辺は、強力な魔法結界をかけてあります。先生達は常にこの周辺を見張っているのです、何かあったらこの地図にコールドの魔法をかけてください。それが先生達へのサインになります」

話を聞きながら、とんでもない試験だなあ、と当然思った。けど、怖じ気づいちゃだめだ、だめだ！　ファイト！

「ちょっと後ろを向いてください……」

？　何だろう。

すると、ボクの肩に何かを取り付けられた様な気がした。

側にあつた鏡を見ると、それは小さな肩パッドが付いた魔導師のマントだった。

「付けごごちはどうですか？　それは、多少のファイヤーやアイス

の魔法から身を守ってくれますよ」

実技の先生の話聞きながら、ボクはほんとに魔導師になったみたいでとても嬉しかった。幼稚園のみんなも、後ろから「かっこいい！」という声を掛けてきた。

「さあ、この魔法陣へ。いよいよ試験が始まります。がんばってくださいね」

そんな先生の声とともに、魔法陣に乗った。

視界が一瞬ぼやけた……あれ？ どうしてだろう？

うーん…… やっぱりこの浮遊感にはなれない……

ワープした所は、ほんとに静かな場所で、ボクは一瞬怖くなった。

……でも、みんなが見守ってるんだから、こんな所で怖じ気づいちゃ

だめだ！ ファイト！ ボク！

ちよつと自分を励ましてから、地図を開いた。

「目の前の森は……この神殿のある森か。よし、がんばろう！」

ボクは一気に駆け足で目の前の森へと入っていった。

まさか、この森で思いも寄らない出会いをするとは、この時は思ってもいなかった……

いよいよ試験開始！（後書き）

次話より本編の試験内容へと入っていきます。
どうぞ、これから宜しくお願いします！

試練1：トレントの群れ（前書き）

この話から本格的な（？）本編です。

サブタイトル前の数はここから数えていくつもりです。

試験1：トレントの群れ

「うわー。ほんとに森の中だなあ」

今の言葉はどう聞いても変なんだけど、でも、これが今のボクの率直な感想だ。

ボクは最初、いくら何でも実際の森みたいにとっちを向いても木、木、木なんて状況はないよなあはは。程度に思ってたけど……

……

……甘かった！

さすが魔導養成スクールの入学試験。本当にどこもかしこも木、木、木、木、木、林、森……

……実を言うと、ボクはちよっぴり迷ってしまった。

「うーん、この地図だとずーっとまっすぐ突き進めば出られるはずなんだけど……そもそも神殿を見つけないと意味がないし……」

ガサツ。

「？ 何だ、今の……」

ボクは立ち止まって辺りに耳を澄ませた。

ガサガサツ。

……な、何かこっちに来る……

ボクはごくりと唾を呑んで、息を殺した。

……

……あれ？

急に、物音がやんだ。辺りを見回しても、何もいない。さっきと同じ、木、木、木……
「なーんだ。ボクの気のせいか……」

ガチィッ！

！！

「な、何だこれは！」

ボクの体に、急に太い木の枝の様な物が巻き付いてきた。慌てて外そうとしたが、身動きがとれない！

「あつ！」

なんと、ボクが捕まった途端、周りの木が少しずつ動き出して、ボクの方に近づいてきた。

「こいつらは……トレントだ！」

トレント 周りの普通の木に紛れ込んで、敵を油断させてから一気に集団で攻撃してくる、木の魔物だ。幼稚園の授業で、イリュージョン幻影なら何度も見てきたけど、実際の姿を見るのは初めてだ。………どうやら知らず知らずのうちに、ボクはトレント達の群れに紛れ込んでいたのだ！

(確かトレントは炎系ファイヤーの魔法に弱かったはず………よし)

ボクは右手だけを何とか自由にしたあと、周りのトレント達に気づかれない様に、そーっと後ろ手にやって………

(いまだ！)「フレイム！」

ボワッ

小さな炎だったが、燃えやすイトレントは見事に火が移った。突然のことに、ボクを押さえていたトレントは暴れだし、ボクを締め付けていた枝がゆるんだ！

「やった！」

出られた、と思った束の間、ボクの目の前のトレント達が一斉に襲いかかってきた！

「うわっ！」

ボクは何とか一体のトレントの木の枝の攻撃をかわした。でも、すぐに二体目、三体目と襲ってくる。

（こんな状況じゃ一体ずつにフレイムをかけている時間はないし…

……………よし、一か八か）

ボクはとにかく走って、なるべくトレント達との距離を遠ざける。そして、何とか落ちて着いて魔法を発動させられる距離をとった。

トレント達が一斉にどんどん迫ってくる。

（まだまだ……………まだこの魔力じゃ……………）

ボクは迫ってくるトレント達に気をとられないよう、必死に魔力の方に集中した。……………そして、遂に一斉にトレント達が襲いかかってきた！

「今だ！ ファイヤー！！！」

ゴオオオ！！

ボクの放ったファイヤーの直撃をくらったトレント達は、お互いの枝にそれぞれ燃え移って、あっという間に黒こげになってしまった。

「今のうちに！ ……………」

もうほとんど魔法を使えない状態になったボクは、他のトレントがくる前に、全速力で走り出してこの場から逃げ去った。

試練1：トレントの群れ（後書き）

ここでちょっとメール返信を…（こんな所でごめんなさい……………）
「第二部分の誤字、修正しました； おっちょこちよいなもんで、
つい見落としてました；；報告有り難うございます」
では、なるべく早めに更新しますので；よろしくお願いします！

試練2：突然の出会い（前書き）

ずいぶん更新が遅れてしまってますみません。
ではどうぞ。

試練2：突然の出会い

結構走り続けた。

気がつくのと、森のより奥の方へ入り込んできてしまったみたいだ。さつきより木が多くて、日光があまり差し込んできてないのか結構暗かった。

……とにかく今の状態じゃ、魔物が来てもどうすることも出来ない。ボクは、微量だけど大気中の魔力を取り込もうと静かに深呼吸をした。

スウー

ハアー

……………あれ？

なんだかずいぶん体が楽になった気がする。

さつきの深呼吸だけで魔力がどんどんボクに流れ込んできた。

「……………ひよつとして、この辺りは樹木が多いから、その分魔力が多いのかな？」

大気中の他に、木や草なんかの自然物もわずかだけでも魔力を持ってるって事は、幼稚園で教わった。でも、一回でこれだけの魔力が来るって事は、この辺りの樹木は魔力を多く持っているのかな？

まだよく分からないけど、多分そうだ。だけど、これで危ないときはいつでも魔力を回復できる。まさに魔力の宝石箱。

「よーし！ そうと分かったら、どんどんいっくぞー！！」

ここからのボクはとっても快調に進んでいった。樹木のおかげで魔力をケチらなくてもいいから、バンバン魔法を使っていた。

トレント1〜2体程度だったらフレイムを掛けてからすぐ逃げて固まって来たときは（こっちのパターンの方が圧倒的に多かったけど……）ファイヤーの魔法でさっきみたいに黒こげ炭にしてから、すかさず魔力を回復して……の繰り返し。

これで何とかへなちよこのボクでも結構進むことが出来た。

……そういえば、さっき一体だけ、アーチって言う森の精がいきなり矢を撃ってきてびっくりしたけど、すぐに逃げちゃった。何をしたかったんだろう……

「……結構進んでるはずなんだけど、どこにも見あたらないなあ、神殿」

いくら快調でも、目的地にたどり着けなかったら何の意味もない。樹木で太陽の位置が確認できないから、一体今は何時なんだろう……

ガサツ

「ん、またトレントか？」

……

「……………」

ザツ、ザツ

………違う。トレントじゃない。何か、人の足跡のような音が草むらの奥から聞こえてくる。

ボクはとっさに身構えた。

ザッ、ザッ、ザッ

.....

「今だ！ ファイヤー！」

ボワッ！！

「あちっ！！！」

ん、今なんか変な声が聞こえた様な.....

ボクはそおつと近寄って、奥をのぞいてみると.....

「あっちち！ 何で急にファイヤーが飛んできたんだ？」

そこには、ボクの放ったファイヤーの直撃に、懸命に手で払って消し去ろうと奮闘している女の子がいた。

女の子って言うてもボクよりかはずーっと年上。十三歳位だろうか。.....って分析してる場合じゃなくて！！

「アクアッ！！」

ボクは大慌てで水系の魔法ウォーターを女の子に掛けた。

バシャー

ボクの魔法は女の子の頭の上で見事に炸裂した。

そのせいで、女の子は赤いチエックの入った黒い服、スカートからマントまですっかりびしょ濡れになってしまった.....

「.....ありがとう」

「あつ、ごめんなさい.....あの、大丈夫ですか？」

ボクはおそろおそろ聞いてみた。

「ま、特に強いファイヤーじゃなかったから、黒こげの物は出さずすんだけど」

女の子は一つに束ねた髪を軽く絞ると、小さなフレイムの玉を目

の前に浮かばせて服を乾かし始めた。

「あ。貴方も魔法が使えるんですか？」

ボクはちよつとびっくりして、思わず聞いた。

「……まあ、一応は」

「へえー。実はボク、今ここで魔導養成スクールの実技試験を受けている最中なんです。ちよつと今は上手く進んでないんだけど……」

最後の方はやっぱり小声になってしまった。だけど、女の子の顔つきはみるみる変わっていった。

「へえー！ 魔導養成スクールの試験かあ。貴方が。……実は、

私も試験中なの」

「え、何の試験ですか？」

「それは……」

あ、いきなりこんな事聞くのは失礼だったかな。まだ名前も聞いていなかったのに。

「あ、ごめんなさい……名前はなんていうんですか？」

「私はレイズ。……それで、貴方は？」

「え、ボク、ですか……」

ボクはちよつと返答に困った。が、すぐにおばあちゃんから言われていたことを思い出した。

「ボクは……アストです……」

「アストかあー。変わった名前」

あのつ、とボクはすかさずレイズに言った。

「実はこれ……本名じゃないんです……。……本当の名は誰にも言わない様について、おばあちゃんから言われてるんで」

へえー、とレイズは言った。

「変わってるんだね。分かった、アスト」

何となく、レイズにはやさしそうな雰囲気漂っているみたい。結構接しやすかった。

「有り難うございます、レイズさん」

「別に、呼び捨てでいいよー。気軽に行こうよ」

レイズは本当にとっても気軽な感じで言った。

「あ、レイズはどうしてこんな所に来たの？」

ボクは案外さっきまで気づかなかった。「？」を、やっと言い出した。

「そのこと？ それは……………」

試験3：新しい仲間

「えっと……どっから話そうかなあ……」

さつき出会ったこのお姉さん レイズは突然腕を組み始めて考え出した。

「やっぱり自分の事から話し……いやいや、それはいくら何でも……うーん、やっぱり試験内容からってそれじゃあ……あーもうっ!!」

「えっと……大丈夫？」

ボクはおそろおそろ聞いた。

「うーん、やっぱりもういいやつ！ ねえ、アストそこ座って」

レイズはボクに近づいてくると（顔がくつききそうな位に）真剣な声で言った。

「あのさあ……とりあえず今からざつと説明するけど、質問無しであと、変に思ってもちゃんと信じてね。……って自分でなに言ってるだろう……」

「あ……分かったよ……どうぞ、話して……」

僕は近くの岩に座ると、レイズの方に耳を傾けた。

一瞬、森がいつそう静まりかえったかと思うと、レイズが話し始めた。

「えっと……私は、人間とはまた違う『無導使』っていう種族の一人で、その無導使というのは主に 実質これしかしてないけど 輪廻サイクルがうまく廻る様に、霊界から見張っている らしい……ごめん、実際私もよく分かってないんだけど」

…………とーぜんこれを聞いているボクもよく分からない。輪廻サイクルとは何か、と一瞬間こうとしたけど、レイズが最初に言っていた事を思いだして、慌てて口を押さえた。

レイズは話を続けた。

「さつき霊界から見張ってるって言ってたけど、無導使の仕事は大半が地上に降りてきて行っているらしい。そこで輪廻サイクルが上手く行われてない所を、私たちが直してる…………まあほとんどサイクルに引っかかって邪魔してる事の方が圧倒的に多いんだけど」

ここでレイズがちよっと一息ついた。

そして、また話し始めた。

「…………さつき言ったみたいに、ほとんどが地上で仕事を行っているから、それなりの技術を身につけていないと騒ぎを起こすことがある。人間に私たちの存在知られちゃうと、いろいろまずいから。だから今、無導使になるための試験として地上に隠されている六つの黒水晶を探してるの。で、合格すると…………」

「合格すると？」

「…………一応半人前としては認めてもらえる」

あ、半人前か…………

こんな事思っちゃ悪いけど…………

「ざつと話すとなんな所。よく分からなかったでしょ？」

「うん！ 分からなかった！」

ガクッ

レイズは岩の上から落っこちた。

「そ……………そんなきはきと言わなくなっちゃって…………」

「あ、でもレイズも試験でここに来たんだね……………って、どうやっ

てあの結界を破って入ってきたの？」

ああそのこと、とレイズはどこからかさつと変な杖を取り出した。

「これ。これに魔力を入れるととても強い力を生み出す事が出来るの。あんな結界なんてイチコロよ。この先の宝石が強く光るほど、黒水晶が近いって事。だからここまで来たの」

へえー。

確かに、先に付いている宝石はかなり強い光を発している。

「……ところで、アストはどんな試験を受けているの？ こんな暗い森の中をさつきからぐるぐる回ってて……」

「え、どうして知ってるの？」

「時々見かけたから。なんか迷ってそうな表情してた」

うう………当たり前だ。

「えっと………僕はこの森の中にある神殿を探してるんだけど………」

……

「ああ、それならさつき見たけど」

………ええっ！！

「どっ、どっで？」

「あっち」

そう言つと、レイズは「あっち」を指差した………。

「あ、あっちかあ………」

「なんかやたらとアーチがいてうっとおしかったわ。アストは見なかったの？」

あ………そう言えばさつき一回だけ………。

『……………』

「よーしっ。アスト、さっさと立って！ 行くよー！」

へ？

「ど、何処に？」

「決まってるんじゃない。例の神殿よ」

レイズはなんだかとても張り切っている。

「え……………レイズは特に用はないんじゃない？」

「黒水晶がこの近くにあるって事だから、どうせなら一人より二人の方が心強いでしょ？」

確かにそうだけど……………良いのかなあ……………？

それに、ボクなんかと付いて行って、レイズは別にいいんだろうか？……………こんな事自分で言いたくないけど。

「ところで、あといくつ見つかってないの？」

「あと二つ。もう少しなんだけど、期限が明日の、日が昇るまでだから、急がないと行けないの。アストは？」

「……………あと三つ」（ホントの事いうとまだ一つも見つかってないんだけど……………）

「よしっ、さっさと行こう！案内するよっ」

そう言うとレイズはさっさと進んでいった。

「あ、待ってーっ」

こうして、ボクの試験は少し賑やかになってしまった……………。

……………本当にいいんだろうか？ボクの中にはまだ不安が残ったままだ。

試練4：神殿にて

ボクら二人は神殿の方へ向かってゆっくり歩いている。

しばらくはさつきと変わらない状況が続いたけど、さつきレイズが言ったとおり、今はトレントよりもアーチに出会う数の方が多くなっていた。

ただ、アーチは一発だけ矢を放つとすぐにどこかへ逃げてしまうからなかなか倒せなくて、むしろ矢をよけるのに精一杯だった。

「ねえ、……………、ほんとにこの先に神殿があるの？」

ボクはどこから放たれた矢をかわしながら言った。

「ああ、……………、間違いない、……………、よ……………」

レイズも2発飛んできた矢をかわしつつ答えた。

「さつき神殿近くにいたときも、……………、こんな、……………おっと……………、状態だったから……………」

「……………確かにアーチの数だけは多くなって、……………、みただね」

矢をかわしていくうちに、ボクはもうこの状況にすっかり慣れてしまった。だけど、やっぱり進みづらいからそんなに急いで行く事は出来なかったけど。

「ねえ……………なんだかずいぶん森が深くなってるけど、まだ着かないの？」

「……………も、もうすぐ着くよっ!!」

と、その時、急に目の前がぱつと明るくなった。

ボクは一瞬目が眩んだけどただ日光が差してきただけで、深い所からは抜け出したみたい。そして目の前には、ツタがあちこちに絡みついている、古めかしい神殿があった。

「わぁー、ここかぁ……………」

「ほらほら、ぼーっとしてないで、さっさと入るよ!」

僕が思わず見とれていると、レイズが僕の手を引っ張った。

「あつ、…ごめん」

「まったく…用があるのはアストの方でしょ？」

「あつ……そっか」

「……大丈夫？」

うう…大丈夫、かな……

入ってみた所はとてつもなく広い部屋だった。ここを走り回ればかなりの運動になりそうだなあ。

……でも、先へと続く通路はその広さに反して小さな通路だった。

「天井も高いなー。……にしちゃあ何も無い…ま、いっか。さっさと進もう！」

しばらく通路を進んでいた、その時。

ビュンッ

「うわっ！ー！」

ボクはとつさに後方から来た物をかわした。

「な、何今の？」

ヒュン

「おっとと……これは矢だ……ここにもやっぱりアーチがいるのかな？」

僕は振り向くと、手に弓矢を持った3匹の小さな妖精が薄笑いを浮かべて立っていた。

「へえー、アーチが人前に出てくるなんて珍しいね」

「ちがうっ！ これはグランドアーチ。アーチの上級……って言えばいいかな」

ビュンッ

『うわっ！』

「あっははっ、いつくよー！」
バシィッ

「おわあっ、は、速いよー！」

「ちよつとアスト！ そんな事言ってるなら、早く何とかしてよー！」
レイズが叫んだ。

……よーしっ。いくぞ！

「ファイヤー！」

ボワアアッ

「うわあっ、あっつーい！！」

よし！ うまくきいたみたいだ。
だけど相手はまだ平気な様子だ。

「よーし、もう一発！ ファイヤー！」

……

「あ、れ………？」

「？ ちよつとどうしたの？」

……あ、大切な事忘れてた。

「ボク………もう魔力が残ってない………」

「……落ち込んでなんかないよっ！」

とは言ったけど……

……本当に、ボク、強くならなきゃだめだなあ……

……

試練5：一つめの秘宝玉

ボク達は特に妙な部屋にもぶつからず、ひたすら通路を歩いていた。だけど、通路にはさっきのグラウンドアーチがわんさか出てきて大変だった。

ただ、幸いにも（さっきの森ほどじゃないけど）魔力は何とか回復できたから、まずボクがファイヤーを掛けて相手に少しダメージを与えて、すかさずレイズがファイヤーで焼き尽くす、という連係プレー（？）でボク達はすいすい進んでいった。

しばらく進んだ所で、また広い部屋に出た。ただ、他の部屋と違ってこの部屋は、なんだか不思議な感じがする。

「……………この部屋、魔力を強く感じる。聖域かなんかなのかしら？」

「へえー。確かになんだか体が楽になったみたい」

ボクは、魔力が少しずつ体にみなぎってくるのを実感した。

そして、部屋の奥に台座のようなものを見つけた。

「あ、あれなんだろう？」

ボクはそれに駆け寄ってみると、その台座にはちょうど手のひらに乗っかるぐらいの小さな玉が置いてあった。透明な玉の中には、赤っぽい煙が渦巻いている。

「…これが、秘宝玉か……………」

「へえーっ。これがそうかあ……………」

レイズも近くに来て、秘宝玉をしげしげと眺めていた。

「意外とあっさり手に入っちゃったね」

ボクはレイズに言った。

「当たり前でしょ。アストより魔力もずっとある私が付いているん

ですもの。当然だわ」
「……………それもそうだね」

秘宝玉を手に入れると、またボクらはもと来た道に戻っていった。

行き道と同じように、帰り道にもグランドアーチの達がボクたちを邪魔してきた。当然行きと同じように、ボクとレイズの連係プレー(?)でどんどん進んでいったけど……………、一つ変わったことがあった。

「ファイヤー!!」

ボオツ!!

『あらあら……………』
ボクの放ったファイヤーで、あっという間にグランドアーチ達が気絶してしまった。

「…アスト、なんだか突然強くなったわねえ…」

そう、これだった。

「うん……………どうしてだろう?」
ボクはレイズに尋ねた。

「ああ、それはさっき手に入れた秘宝玉のせいよ。あの魔力が秘宝玉を手にした受験者に注がれてるんじゃないかしら」

「へえ……………そうなんだ」

「…それくらい気づきなさいよ」

行きよりも順調に進んでいったボクらは、あっという間に入り口が見えてくるところまでやってきた。そして、あのやけに広い部屋へと足を踏み入れたときだった。

ドオオン！

「！？」

突然の大きな音にボクらは驚いた、と同時に、入り口と、秘宝玉の台座へと続く道の通路がふさがれていた。

「な、なに？ 突然？」

レイズがそう言ったとたん、神殿のすべての明かりが消えた。ボクは、レイズの姿がまったく見えなくなってしまった！

「レイズ、そこにいる？」

「うん、……いたっ！ ちょっとアスト、足踏まないでよ」

そんなことしていた時、突然部屋の真ん中にとても大きな魔法陣が現れた。ボクはそのかたちに見覚えがあった。

「ワープの魔法陣……？ それにしてもかなり大きいわね……」

しばらくすると、ゴゴゴツツつという轟音とともに、とんでもないものがそこから現れた……！！

「……………！！！」

ボクらはあつと息を呑んだ。

現れたのは、背丈がボクらの何倍もあり、全身が石でできている人形………巨大なゴーレムが僕達の前に立ちふさがった。

試練6：激戦

突然現れたこの石の巨体に、ボクは足がすくんでしまった。当然、ゴーレムも幼稚園で見たことがある。ただ、それはイリユージョンだった。

今、目の前にいるのは本物なのだ。

…もし、このゴーレムがすぐに攻撃なんかしてこなかったら、ボクはしばらくこの場所から動けなかったと思う。

「うわあっ！」

神殿全体が揺れるような大きな唸り声を上げて、ゴーレムは大きな石の腕を振り下ろしてきた。それをなんとかボク達はかわした。やっぱりこの巨体のせいか、さっきのグラントアーチ達よりはずっと攻撃が遅かった。…ただ、イリユージョンゴーレムよりずいぶん行動が遅いような気がする。

ボクはゴーレムといくらか距離をとって、様子を見てみた。ゴーレムは振り下ろした腕をゆっくりと起こしている。

「……………あれ？」

ボクはとつさにレイズの方を見た。レイズもやっぱり、あのゴーレムの外見に驚いているみただった。

このゴーレムには植物が生えている。

さっきは暗くてよく見えなかったけど、石の間からひよるひよるといくつもの草が伸びていて、表面にはコケがびっしり生えていた。

「…このゴーレム、何年も経った古いものを無理矢理動かしてるって感じがするわね。それで動きが鈍いのかしら」

うわっ、またゴーレムがあの手を振り下ろしてきた。

かなり楽によけられたけど、攻撃したときの衝撃で、たくさん瓦礫が飛び散った。…近くにいたらひとたまりもない。

「っと、とにかくさっさとこいつを倒さないと……………」

レイズはそう言うと、魔力を両手に溜め始めた。

「ファイヤー！」

強力なレイズのファイヤーは、一瞬にしてゴーレムの体を包み込んだ。

それを見てボクは「やった」と思った。だけど……

「！ うわあっつー！」

ボクは間一髪、ゴーレムの攻撃をかわした。

レイズの攻撃がまともに当たって、かなりのダメージを受けたはずなのに、ゴーレムはそんな様子をまったく見せなかった。体についている植物が少し焦げた程度だけだ。

「そんな……」

レイズはまったく力が衰えていないゴーレムを、呆然と見上げていた。

「レイズ、どうしよう？」

ボクはさらに怖くなって、震えた声でレイズに問いかけた。

「これくらいじゃ痛くも痒くもないみたいね……、アスト、ちょっと提案があるんだけど」

「え？ なに？」

ボクはレイズの「提案」に耳を傾けた。

「……………へえーっ。なるほど」

「感心してる暇なんか無いわ。さっさといくわよ！」

「うん」

まずボクは、レイズよりいくらか離れた所へゴーレムを誘い出した。

「こっちこっち！ こっちだよー」

そのときゴーレムは何回か攻撃を仕掛けてきた。攻撃自体はグラウンドアーチに慣れてしまっても楽によけられたけど、それよりボクが怖かったのは、攻撃したときに生ずるあの瓦礫だった。この部屋自体はかなり広いけれども、ゴーレムもかなり大きかったので逃げる場所は思ったよりもかなり少なくて大変だ。

「おつとつ」

ボクは飛んでくる破片を必死でよけながらゴーレムを部屋の隅へと移動させた。ボクは足を止めると、すぐさま呪文を唱えた。

「アイス！」

もちろんアイス自体の威力に期待していたわけじゃない。ボクがゴーレムの足元にはなったアイスは元の威力が弱いせいもあって、足を一瞬凍らせたと思ったたらあつという間に砕かれてしまった。

だけど、その一瞬でよかった。背後には魔力を溜めて魔法の発動準備をしているレイズの姿が見えた。

「とつておき、いつくよー！ ファイヤーストーム！」

レイズの放ったファイヤーストームは見事にがら空きのゴーレムの背中に命中した！

ボクはその威力を見て、呆気に囚われていた。さつき彼女が放ったファイヤーの何倍の威力を持っているのがすぐ目に見える。ゴーレムの体全体を燃えさかる炎がゴウゴウという音を立てて包み込んでいた。

「やったあ！」

ボク達は嬉しくて声を上げた。ところが、ボク達の期待を裏切るように、巨大な石の人形はまたしても動き出した。そして、攻撃が当たって油断していたレイズの方に、あの唸り声を上げて襲い掛かってきた！

「……！」

予想もしてなかったゴーレムの行動で、レイズの顔は青ざめていた。ボクが助けようとした瞬間、ゴーレムはあの巨大な腕を振り下ろした。いつもの空振りしたときの音とは違う、鈍い音が僕の耳に入ってきた。

「……！ レイズ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9150c/>

グランドフィールド

2010年10月28日07時04分発行